

珠洲市 馬縹泊遺跡 現地説明会資料

調査地 珠洲市馬縹町地内

調査原因 いしかわの優しい美知整備事業 主要地方道 大谷狼煙飯田線

委託者 石川県奥能登土木総合事務所（石川県土木部道路建設課）

調査主体 石川県教育委員会（調査担当：公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

調査期間 令和5年10月17日～同年11月30日（予定）

調査面積 200 m²

令和5年11月23日（木・祝）

（公財）石川県埋蔵文化財センター

〈調査概要〉

海岸に隣接する馬縹泊遺跡の立地は海と強いつながりがあることを示しています。それは塩づくり（製塩）です。製塩に使われた土器が出土する古代の遺跡は珠洲で30箇所程度が確認されており、岩礁や砂浜問わず盛んに塩づくりを行っています。まさに現代に続く珠洲の伝統産業といえます。

今回の調査では、調査区中央から東にかけて塩づくりと思われる炉跡を検出し、焼土や焼石が複数か所で見つかりました（炉1～4）。それぞれ30～40cm四方と規模は小さめで、炉2は自然にその場にあった石を利用しています。また焼けた痕跡はないものの、炉に使用するための粘土が3か所で見つかりました。地山に10cmほど入り込んでおり、穴を掘って粘土を埋めたようです。炉や粘土の周辺からは火を受けた可能性のある、ぼろぼろになった石が数か所で見つかりました。炉の周辺に建物の跡はなく、製塩に伴う施設などはなかったと思われます。出土品の数はかなり少ないものの、製塩土器、土師器壺などがみつかりました。出土した製塩土器のほとんどが1cm程度と、通常使用して壊れる以上に粉々になっている様子がみられました。

遺跡周辺は山が海際までせり出し、海岸は岩や砂利が露出した様相が広がっています。本遺跡で行われた製塩は、現在海岸で見られるような、砂地に自然の岩が露出している状況を利用したと考えています。出土品から10世紀～11世紀頃に人の活動があったことがわかり、この年代は土器を用いた製塩から鉄釜に切り替わる時期にあたります。炉の規模が小さいことから、小規模な製塩であったと考えられます。また製塩が行われた面を覆う土から12世紀頃の珠洲焼が出土したことから、12世紀には製塩活動が行われなくなったことがわかりました。



図1 調査区位置図



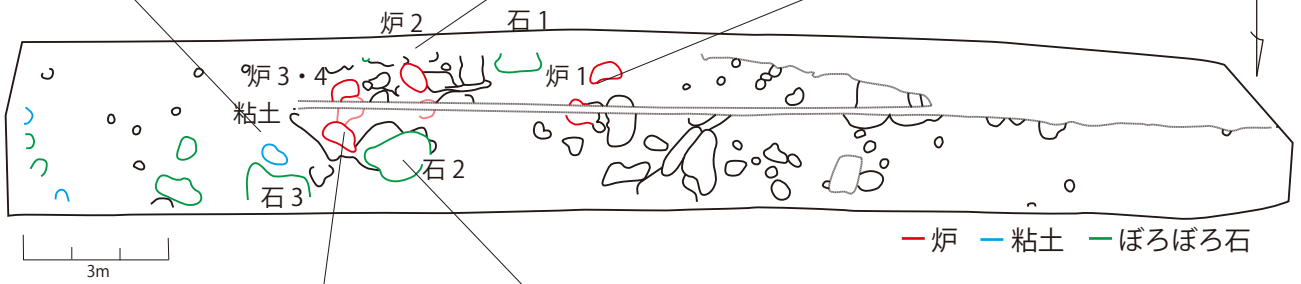
図2 珠洲市における製塩遺跡分布図



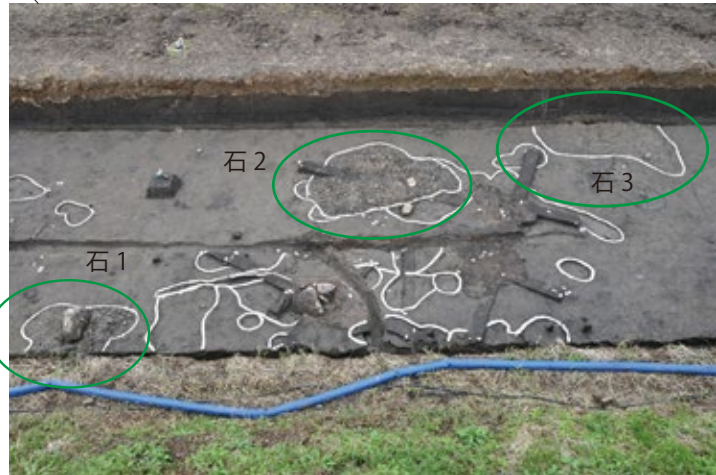
粘土 (東から)

炉2 (北東から)

炉1 (南から)



炉3・4 (東から)



ぼろぼろの石 (南から)



東側上空より調査区を望む (海と山にはさまれた場所であることがわかります)

古代の能登の塩づくり

○土器を使った塩づくり（土器製塩）の工程

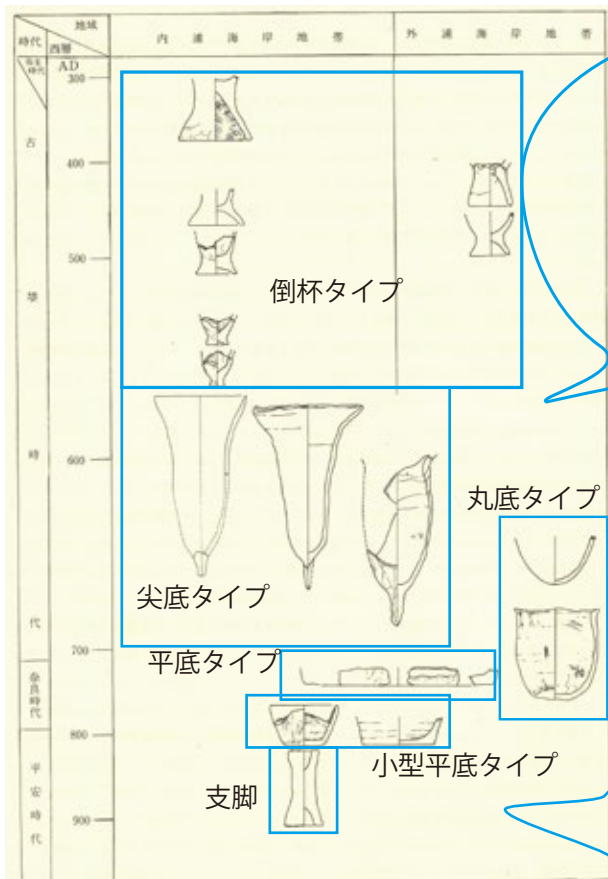
1 採鹹（さいかん）：濃縮した海水（＝鹹水（かんすい））を得る

海水をそのまま煮詰めると燃料も時間もかかるため、現在と同じく海水を濃縮させてから土器で煮詰めていたと考えられています。海藻に海水を注ぐ、乾燥させた藻を焼いて灰に海水をかけるなどのやり方が考えられていますが、現在まだはっきりとわかっていません。8世紀頃には鹹水を得るために^{あげはま}揚浜塩田が行われていた可能性も指摘されています。

2 煎熬（せんごう）：鹹水を土器で煮詰める

時代によって使う土器の形が異なります。

古墳時代に倒杯タイプが若狭を通じて能登に入ってきました。この頃の製塩は専門的ではなく小規模であったようです。その後7世紀に入り、底部がとがった尖底タイプが出現し、能登の土器製塩は最盛期を迎えます。熱が伝わりやすく、大量の塩をつくることができました。その後丸底タイプが、ほどなくして鉄釜を模した平底タイプが現れます。尖底より燃料や時間はかかりますが、細粒の塩を大量につくることができ、8～9世紀に使用されました。その間、尖底タイプも引き続き使用されたようです。10世紀にはいと次第に土器製塩は下火となり、鉄釜を使った製塩に移行していきます。



・尖底タイプと平底タイプの違い
固形の塩ができる尖底タイプに対して、平底タイプや鉄釜は細粒の散状塩をつくることができました。塩の需要が変化したことで土器のかたちが変わったのではないかと指摘があります。

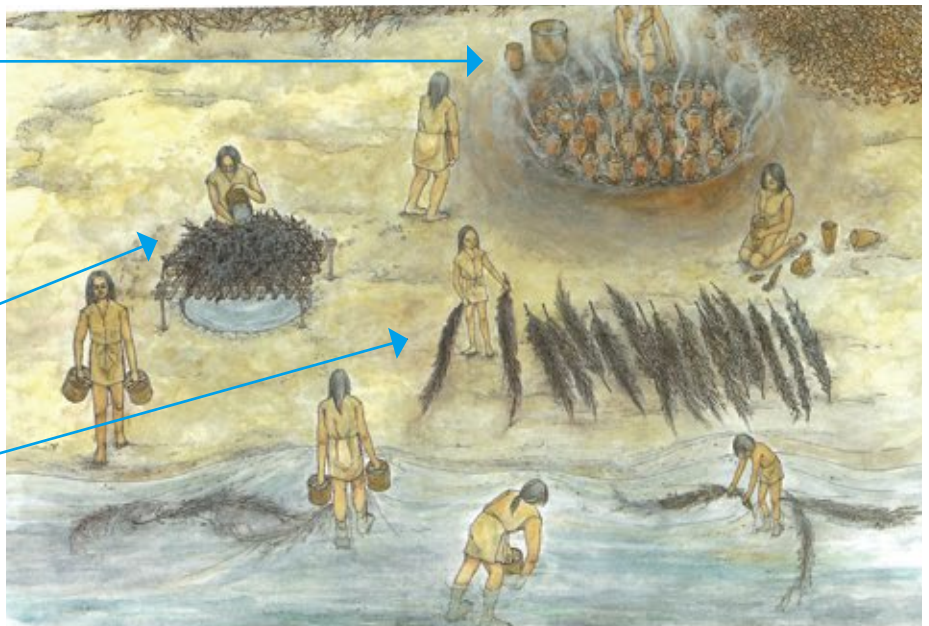
・小型平底タイプ
平底タイプで煎熬したあと、固形の塩をつくる際に使用したと考えられます。

・支脚（しきやく）
平底タイプを上置くことで熱を効率よく伝えることができます。

能登式製塩土器編年

・煎熬の様子
地面に土器を大量に並べ、火にかけています。

・採鹹の様子
海水に浸した海藻にさらに海水を注ぐことで、下にたまった海水が濃縮されます。



古墳時代後期の土器製塩想像図（畠山尚子氏画）
七尾市 1999『図説 七尾の歴史と文化』より

〇炉について

能登では、保湿性がよく炉の温度を保つのに適した珪藻土を使用する例が多くみられます。ほかにも石を使用した石敷炉、石囲炉などの種類があります。

〇土器製塩と能登の塩づくりのその後

土器から鉄釜となり、現在まで続く揚浜塩田にどのように移行したのかはよくわかっていませんが、平安時代後期には揚浜塩田が開かれ、中世を通して普及していったとみられます。その後、近世から幕末、明治にかけて能登の塩づくりは最盛期を迎えました。しかし国の政策や安価な塩の流入により次第に能登の揚浜塩田は生産を制限され、昭和 34 年には伝統技術の保存と観光を目的とした 3 軒を残すのみになりました。

その後、昭和 44 年に能登の揚浜製塩用具が国の重要有形民俗文化財に指定され、さらに平成 4 年には揚浜式製塩が石川県無形文化財に指定されます。これにより能登の揚浜製塩を地域づくりに活かす気運が高まり、地元有志や民間事業者によって珠洲の塩田は再度復活・増加していきました。平成 20 年には能登の揚浜式製塩の技術が国の重要無形民俗文化財に指定されました。多くの人の、能登の揚浜製塩を残したいという思いが、現在の能登の塩生産につながっています。

参考文献

- ・宇野隆夫・前川 要編 1991『能登滝・柴垣遺跡製塩遺跡群』富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会
- ・戸潤幹夫 1983「能登式製塩土器一型式分類とその変遷一」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- ・戸潤幹夫 1999「10 製塩土器のはじまり」『図説 七尾の歴史と文化』七尾市
- ・空良寛 2009「能登半島の製塩遺跡」『日本海域の土器製塩一その系譜と伝播を探る一』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- ・能登のくに刊行会編 2003『能登のくに一半島の風土と歴史』『能登半島の民俗と歴史』
- ・安英樹 1999「古代の塩づくり実験 in 能登島」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会

参考引用 HP

- ・能登半島 珠洲の塩協議会 <http://suzusalt.org/whats/index.html>